

古典について —その価値と普遍性—

近松 明彦

最近、松山壽一著『叢書シェリング入門6 悲劇の哲学—シェリング芸術哲学の光芒』を読んだ¹⁾。ドイツ哲学以外の分野を専門としている筆者は、書評のように整った形でこの文献を紹介するだけの力をもたないのであるが、この書物は単に18世紀から19世紀にかけてのドイツの哲学者、フリードリヒ・シェリングの思想に関する著作であるだけでなく、古典古代におけるギリシアの悲劇について多くのことを教えてくれる、価値の高い文献でもある。この書物を読む過程で、ギリシア悲劇がシェリングの思想や彼と同時代のドイツの思想家たちの思考にとって、いかに重要なものであったかということが筆者には強く印象づけられた。そして、ヨーロッパの人たちにとって、ギリシアやローマの西洋古典文化が今日に至るまで様々な形で影響を持ち続けていることについて、改めて考えさせられることになった。

この書物についての感想から出発して、ギリシア文化から現代の西洋文化、そして更に、現代の日本文化への影響ということへ向けて議論を飛躍させることは、何らかの浅薄さを伴う点があったり、あるいは、その書物のテーマから見て、人に牽強付会ということを感じさせる点があったりするのではないかと危惧する。それでいてなお、西洋古典文化と現代の文化とのつながりということに、筆者は近頃大きな関心を持っており、そのことがこの随筆を執筆する動機につながっている。個人的なことになってしまうが、多忙な日課のなか身近なところで直接経験するものや、あるいは、メディアによって伝えられるものなど、様々な出来事について考えさせられることが度々ある。また昨今、多く

の人々に見られる流行や傾向といったことなどについても様々なことを感じさせられる。他方それと同時に、学生時代周囲の人たちから様々な手助けを受けるなか自分なりにギリシア語学習に熱中したと思える記憶がよみがえる瞬間が今も時折訪れる。単純化して言えば、短期的と長期的ということになるのだろうか。日常の短期的な課題に追われるなか、歴史をさかのぼり、また、将来を展望するという長期の課題については、一種の延期された宿題のような形であとに残してしまっている。

筆者は英米文学を専門としているわけではないが、現在主に英語を扱う事に携わっている関係から英米文学に多少接点をもっている。20世紀の英文学に関して、例えば、ジェームズ・ジョイスのような、ある意味で非常に現代的な性格を備えている作家であっても、その代表的作品である『ユリシーズ』の題名からもわかるように、西洋古典文学から強い影響を受けているということが言われている²⁾。このように、今なおギリシアの古典文学の伝統が西洋文化の中に確実に存続しているということは今さら言うまでもないことだと考えるべきかもしれない。

ここで、比較のために、我が国における和漢の古典の影響ということを参考にしてみよう。我が国のいわゆる王朝文学などと呼ばれるものは、やまとことばで書かれているという点で今日の日本語との間に連続性があり、そのような点でもある種母性的なものを含んでいるように感じられるが、それに対し漢籍の場合は、漢文、即ち、古典中国語という一種の外国語で書かれているという点で、何らかの距離感を伴いながら、ある種の他者性のようなものや一定の客観性といった要素を含んでいる。そのように筆者には感じられる。このような認識が仮に何らかの程度正しいとして、そのような状況を西洋文学の世界に当てはめるとすれば、母語との連続性という点で、西洋の古典文学は、ギリシア語で書かれたものにせよ、ラテン語で書かれたものにせよ、ゲルマン系の言語以外のことばで書かれたものである以上、英語圏の人たちにとって一定の距離感を感じさせるようなものであるに違いない、と筆者は思う（もともと、その「距離感」は印欧語の枠内におさまる程度の距離のはずでありはするが）。それに対し、例えばフランス語の話し手のように、ラテン語に由来する言語であるロマンス諸語を母語とする人々にとっては、ギリシア語による作品ではなく、ラテン語による作品の方をより身近に感じやすいのではないだろうか。但し、以上はあくまでも筆者の想像に過ぎない。

このような母語との歴史的連続性という点で、筆者はここで現代ギリシア文

学に注目しようと思う。現代ギリシアの作家や詩人にとって、ギリシアの古典文学は彼、彼女らの母語と一定の連続性を持つと思われるからである。とはいえ、ここで筆者が現代ギリシア文学に言及することは、冒険的な試みと言わざるを得ない。再び個人的な話になってしまうが、筆者の場合、学生時代ある程度であれば自分なりに古典ギリシア語やコイネー・ギリシア語に親しんだことになるのかもしれないのだが、それと比べて、現代ギリシア語については、大学院生であった頃、初級クラスでとりあえず一通りのことを学習して以来、その言語の学習を怠ったまま今日に至っている。それにもかかわらず、なぜここで敢えて現代ギリシアの文学という話題に触れようとするかと言えば、母語との歴史的連続性というテーマに加えて、更にもう一つの主題に興味をひかれるからである。このもう一つの主題とは、二つの異なる文学的伝統が接触し、合流するところから結果的に生じる創造性や豊かさといったことである。そして、今「二つの異なる文学的伝統」と書いたのは、具体的には、西洋と東洋の文学の伝統、特に、ギリシア文学と日本文学の伝統である。

二十世紀のギリシアを代表する詩人ヨルゴス・セフェリスは、フランス留学の際に、フランスにおける日本の俳句、俳諧の流行に接したと考えられ、現代ギリシア語で俳句を作ったことが知られている³⁾。今、手許にある志田信男（訳・編）『セフェリス詩集』を見ると、以下のように、俳句の影響を受けたセフェリスによる短詩形式の作品を読むことが出来る。

この円柱には孔がある
見えるかい
ペルセフオネが？⁴⁾

上に引用した作品は、俳句の影響を受けているだけでなく、ギリシアの古典文学とも関係している作品である。高橋りえこ「現代ギリシア詩に於ける『俳句』の受容（1）」は、「セフェリスのみならず現代ギリシア詩に一般的な作詩法の一つに神話やホメロス、古典悲劇のモチーフを読み込む手法がある。次の2句はこの手法が用いられている。」と述べたうえで、セフェリスによる二つの作品を引用しているが、そのうちの一方が、先ほど筆者が引用した作品である⁵⁾。

このように、単にギリシアの古典的伝統がヨーロッパ各地に向けて、地理的に広がるようにして継承されたということだけでなく、セフェリスのような場合には、このギリシアの古典的伝統が古代ギリシアから現代のギリシアへ向け

て、ある種の一貫性、連続性をもって受け継がれている。そのように考えて差支えないだろうか。と同時に、一般にジャポニズムなどの名称で知られる日本の文化的伝統が、ギリシア文学の長い伝統に対して、いわばその先端部に近いあたりで合流している。そのように見て良いだろうか。現代ギリシア語や現代ギリシア文学の素養を持たない筆者は、そのようなことを夢想する。

ところで、逆にギリシア文学から日本文学への影響はどのようになっているのであろうか。恐らくは、そのようなテーマを専門的に扱う研究領域があり、そのような分野では、そのような問題について何らかの見解や、何らかの学説のようなものを、多分発展させているのだらうと想像している。しかし、ここでの筆者の立場は、あくまでも一般の読書愛好家としての立場である。そのような者の観点から敢えてこの問題について語るとすれば、どのようなことが言えるであろうか。一般に、日本の近代文学史は、日本社会の近代化ということと無関係ではないであらうし、よく言われることかと思うが、近代化ということは西洋化や欧化主義などといったことと、互いに交錯するようにして、多くの点で重なるのではないか。では、西洋近代に対し、西洋古典はどうであらうか。西洋古典文学は日本近代文学に対し、どのようなインパクトを与えたのであろうか。この問いに対する答えは、筆者が想像するに、どこか戦前の我が国における教養主義などが関係する領域にあるのではないだろうか。しかし、このような仮説を文献に基づいて実証するには、今の筆者が持つ時間と力量はあいにく十分でないように思う。そのようなことから、ここではよく知られた事例の中から筆者が一人の詩人と一人の作家を選んで彼らを以下に取り上げることにする。そのようにして、ギリシアの文化が日本文学に影響を与えた様子を見ることで、筆者が欠いている点を補いたいと思う。どの詩人、作家を取り上げるか、などといった選択に際して、恣意的な選択を行ってしまう点があるかもしれないが、それでも、一種ケース・スタディーの縮小版のような仕方で、ささやかなものながら一定の意味を持たせることが出来るのではと思う。

筆者が選んで取り上げる一人の詩人と一人の作家のうち、最初に取り上げる詩人は、西脇順三郎である。西脇は、その活動の初期の段階で、西洋古典文学の影響のもと、ギリシア文化に題材を取った作品を作っている。西脇の詩集『Ambarvalia』の中に収められた「ギリシア的抒情詩」という作品である⁶⁾。この「ギリシア的抒情詩」という作品は、複数の詩から構成されているが、次に引用する詩から始められている。

天 気
くつがへ
(覆された宝石)のやうな朝
何人か戸口にて誰かとさゝやく
それは神の生誕の日。⁷⁾

上に引用した「天気」という作品は、中世につながる要素もあると言うのだが、西脇が「ギリシア的抒情詩」を作る際その根底にあったのは、そのタイトルからもわかるように、当時の西脇が西洋古典文学に対して持っていた興味や憧憬だと言う⁸⁾。また、西脇個人がそのようにギリシア文化に関心を抱いたこと背景には、当時の日本社会（あるいは、日本における当時の、いわゆる読書人の社会、と言うべきであろうか）の一つの傾向としてニーチェの著作が広く読まれていたということがあったようである⁹⁾。

筆者が選んで取り上げる一人の詩人と一人の作家のうち、次に取り上げる作家は、三島由紀夫である。三島がギリシア文化に傾倒していたことは余りにもよく知られていると言ってよいだろう。目だった例を挙げるとすれば、『ダフニスとクロエー』を下敷きに三島の『潮騒』が書かれたことは多くの人にとって共通の認識となっているのではないかと筆者は思う。また一方、少年期、清水文雄から国語・国文学に係る方面の指導を受けた三島が王朝文学など我が国の古典に傾倒していたという事実もよく話題にのぼると思う。このように、三島由紀夫の場合東西の複数の異なる文学的伝統がそこに流れ込み、ある意味でそれらを引き継ぐような地点に立っていると言って良いのではないかと筆者は思う。

ここで筆者は、小川和佑著『立原道造研究』において、四季派と呼ばれるグループの詩人、立原道造についての研究の脈絡で、三島について言及されている箇所注目したいと思う。同書では、三島由紀夫がいわゆる「文学的日本主義」から影響されるのに先立って人生の更に早い時期に、立原道造から、また、西洋古典文学（例えば、サッポオなど）から、影響されていたということが示されている¹⁰⁾。同書によると、十代半ば過ぎの三島は次のような作品を書いているという¹¹⁾。

櫛の匂ひは古びた部屋のやうだ。
この懐しい苔の小道の
しめつたあちらにおまへは立つてゐる、

けだかい^{きぬ}白い衣をきて。

……（後略）……¹²⁾

小川和佑は、上に引用した作品について、「先ず、なによりもこの詩には古典的な均衡がある。十六歳の少年の詩というには似合わぬ情緒の抑制が、ここにある。」と評している¹³⁾。このように、三島はギリシアの古典文学からの影響を受けた作品を人生の初期の段階で書いている。日本文学の伝統と西洋古典文学からの影響を統合するという点について、三島の事例は先に筆者がセフェリスに言及したことと比較することが出来ないか。

なお、三島がギリシア文化に関心を持っていたことの背景にも、ニーチェの著作からの影響があるという¹⁴⁾。西脇順三郎の場合にせよ、三島由紀夫の場合にせよ、戦前の日本の知的社会におけるニーチェの流行ということを示している興味深い。

近代文学が近代西洋社会に起源を持つとし、しかも仮に日本の近代文学が、西洋の近代文学の紹介、模倣、吸収といった一時期を経て成立したとするなら、近現代の日本の詩人、作家の多くが、一方で西洋近代に特有の文学上の特質、価値観などと、他方で日本文学史を貫いて流れる文学上の伝統的な特質や価値観といったものとの間で、何らかの葛藤のようなもの、あるいは、アイデンティティの危機といったものを経験することは、想像にかたくない。筆者はそのように想像する。

その点で、古典に立ちかえることは重要な意味を持つ。多くの場合社会によって意識されていないうちに、多くの古典文学作品が様々な時代に、多様な環境、状況のなかで評価や検証をめぐり抜け、結果として社会から「選択」され「生存」を続ける。そのせいか、多くの古典は環境や状況に左右されない価値を保ち、多くの人々の心の特質と合致する要素を備えている。古典は、極めて多くの人に共有されている、ほとんど生得的とすら言ってよい心の特質、普遍的と言ってもよいような人間の精神の本質に適合するのではないか。このような意見は比較的よく聞かれるように思うが、今の筆者も少なからぬ点で賛同してよいような気がする。文化の違いということは、基本的に相対的なものだと思う。既に述べたように、多くの日本の詩人の場合、一方における日本の伝統に根差した自己が、他方にける西洋近代文学の様々な潮流と対立し、その両者の間で葛藤に陥りやすいのではないかと筆者は推察するのであるが、そうであれば、そのような人たちにとって、ある意味で状況への依存の度合いが低く、時

代や環境を超えた価値をもつ東西の古典は、自己を原点に連れ帰ってくれ、「癒し」をもたらしてくれる存在として大きな意味を持つのではないだろうか。そして、今述べたことについて、「日本」を、「西洋社会以外の社会」に置き換え、また、「東西の古典」を「世界の古典」に置き換えることで、この考えを更に一般化することも可能かもしれない。古典の学習は、一面においては厳しい。伝統継承の厳しさであろうか。しかし、また一面では人に信頼感を与え、人の心を癒すような要素を備えている。その上で、複数の異なる文化的伝統を統合、融合する上で、古典は安定した基礎を与え、新たな創造を用意する。そのような点に古典の価値を見ることが出来るのではないだろうか。

以上、特にギリシアの古典を中心に、古典について、筆者個人が想像している所を語らせて頂いた。筆者の専門外の領域について論じたために、議論が学術的なものになってしまうのではないかと恐れたが、逆に、学術的というには余りにも著名な人物たちばかりを事例として取り上げてしまった。そのような反省からも、より均衡のとれた議論を行えるよう、筆者自身、古典に学ぶ態度を見失うことなく学び続けていきたいと考えている。

注

- 1) 松山壽一 (2014), 『叢書シェリング入門 6 悲劇の哲学—シェリング芸術哲学の光芒』, 奈良, 萌書房.
- 2) 次の文献の第 22 章を参照。ハイエット, G. (著), 柳沼重剛(訳) (1969), 『西洋文学における古典の伝統 下』, 東京, 筑摩書房.
- 3) 高橋りえこ (1993), 「現代ギリシア詩に於ける『俳句』の受容 (1) —セフェリスの「練習帖」「練習帖 2」を中心に—」, 『プロピレア』, 第 5 号, ギリシア語・文学研究会.
- 4) 志田信男 (訳・編) (1988), 『世界現代詩文庫 14 セフェリス詩集』, 東京, 土曜美術社.
- 5) 前掲の論文、高橋りえこ (1993)を参照。
- 6) 中野嘉一 (1971), 「詩集『Ambarvalia』(あむばるわりあ)」, 村野四郎, 福田陸太郎, 鍵谷幸信 (編) 『<近代日本文学作家研究叢書> 西脇順三郎研究』, 東京, 右文書院.
- 7) 那珂太郎 (編) (1991), 『西脇順三郎詩集』, 東京, 岩波書店.
- 8) 前掲の文献、中野嘉一 (1971) を参照。
- 9) 中野嘉一 (1971) 参照。
- 10) 次の文献を参照。小川和佑 (1977), 『立原道造研究』, 東京, 文京書房. (なお、本文中の「サッポオ」という仮名への転写形式は、同書での形式にあわせたものであると同時に、三島由紀夫の作品「抒情詩抄」[この文章の中で以下に部分的に引用する詩]の題辞に見られるものにあわせたものでもある。)

- 11) ここで、この文章のなかで先に「筆者が選んで取り上げる一人の詩人と一人の作家のうち、次に取り上げる作家」といった形で、三島を作家として取り上げながら、それでいて、ここでは三島の作った詩に言及することになるが、ご容赦頂きたい。
- 12) 次の全集より抜粋。三島由紀夫 (1976), 「抒情詩抄」, 『三島由紀夫全集第三十五巻』, 東京, 新潮社.
- 13) 前掲の小川和佑 (1977)を参照。
- 14) 佐渡谷重信 (1981), 『三島由紀夫における西洋』, 東京, 東京書籍.